



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	クリスチャン・ローゼンクロイツの原像
Author(s)	シュルーター, 智子
Citation	基督教學, 58, 34-37
Issue Date	2023-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92844
Type	journal article
File Information	03schlueter.pdf



「クリスチャン・ローゼンク ロイツの原像」

シュルター智子

はじめに

本発表では、一七世紀初頭のドイツに登場し、国内外で大きな反響を呼んだ「薔薇十字文書」、すなわち「薔薇十字の名声 Fama Fraternitatis」（一六一四年、以下「名声」）、「友愛団の信条 Confessio Fraternitatis」（一六一五年、以下「信条」）、『化学の結婚 Chymische Hochzeit』（一六一六年）において、薔薇十字団（Rosenkreuzer）の始祖として描かれる「クリスチャン・ローゼンクロイツ（Christian Rosenkreuz、以下CR）」に着目し、その人物像を明らかにするとともに、想定されるCRのモデルについて考察する。

聴き、エルサレムではなくダムカルを目指すことにする。ダムカルで歓迎されたCRは、自然学、数学、アラビア語を学び「Mの書」[Liber Mundi、世界の書]をラテン語に翻訳する。

ヨーロッパに戻ったCRは、学者たちに学問の成果を伝えようとするが、受け入れられず、かえって嘲笑される。CRはヨーロッパにもアラビアと同様に、金や宝石を十分に備えた、王たちに相応しい提案をできるような結社（Societät）が必要だと考えた。ドイツに戻ったCRは、小綺麗な家を建てて、備忘のために彼の旅と哲学を書き留めた。

5年後、CRはかつての修道院仲間三名を呼び寄せた。彼らはMの書の第一部にも取り組んだが、あまりに過酷な作業であり、また聖霊の家と呼ばれる建物も完成していたので、新たなメンバーを加え、独身かつ童貞を誓った八名で書を完成させた。彼らは隠秘哲学と啓示哲学を議論し尽くすと、共同生活をやめてあらゆる国に散っていったが、毎年集まってはその活動について報告しあった。

1. 薔薇十字文書におけるクリスチャン・ローゼン クロイツ

1. 1 「名声」と「信条」におけるクリスチャン・ロー ゼンクロイツ

「名声」はCRの伝記的な記述と兄弟団の発端、CRの埋葬場所の発見について報告し、友愛団の同胞に対する呼びかけに一定の信憑性を与えている。他方「信条」においては、CRに関する記述は中盤で簡単に言及されるのみだが、生年（一三七八年）と亡くなった年齢（一〇六歳）を記し、「名声」の伝記的な記述に重要な情報を付け加えている。以下では「名声」を基に、CRに関する記述を整理したい。

CRは貴族の家庭に生まれたが貧しく、五歳で修道院に入る。修道院でギリシャ語とラテン語を身につけ、ある修道士仲間のエルサレム巡礼に同行する。この修道士はキプロスで亡くなったが、CRはさらに旅を続け、ダマスコからエルサレムを目指そうとするが、アラビアの賢者が奇跡を起こし、あらゆる自然を見出したとの噂を

兄弟団の第三世代になると、CRの死の状況は伝わっていないかったが、メンバーのひとりが地下室で隠し扉を見つけた。地下の祭壇の下にはCRが安置されており、その手にTと記された冊子を持っていた。CRの墓碑銘には、彼の経歴に続いて、「過去と現在と未来の出来事の要約」を作成したこと、一〇〇歳を超えて、病気などではなく「神の霊に呼ばれて」亡くなり、その死が一二〇年秘匿されることが記されている。

1. 2 『化学の結婚』におけるクリスチャン・ローゼン クロイツ

「名声」および「信条」と『化学の結婚』とは、形式も文体もきわめて異なる。前者はマニフェスト（宣言、声明）の形をとり、語り手は薔薇十字団に属する第三世代のメンバーが想定されているが、後者はCRの一人称による小説である。

『化学の結婚』には、CRの伝記的な情報はほとんど含まれないものの、門番に名前を問われて「赤い薔薇十字の兄弟です」と返答しているほか、他の招待客に「薔薇十字の兄弟」と呼びかけられている。また、『化学の結婚』

においてCRは「銀色の長髪」の老人であり、冒頭では山間の小屋に一人で祈りを捧げているが、これは、CRが「聖霊の家」に薔薇十字兄弟団のメンバー二名と暮らしているとする「名声」の記述に矛盾する。さらに、CRの人となりについて受ける印象も「名声」と『化学の結婚』とは大きく異なる。「名声」でのCRは野心にあふれ、知的好奇心が強く、学識と人望を備えた人物として描かれているのに対して、『化学の結婚』では「秘密の事柄に対するとてつもない無知と盲目」を自覚し、「自然の秘密の探求と認識には向かない」とばやき、「どうしたら手っ取り早く使える技を身につけられるか、贅沢な館を建てられるか、世間で不朽の名を挙げられるかなど、その種の考えでいっぱい」だったことを白状しており、謙遜というよりは小心な人物という印象を与える。

2. クリスチャン・ローゼンクロイツのモデル

CRのモデルとしては、さまざまな名前が挙げられているが、ここではそのうち特に関連が強いと思われる何名かを見てみたい。

2. 1 パラケルスス

「名声」において言及された唯一の实在する人物であり、兄弟団の思想にきわめて近い存在であることが示唆されているほか、CRの墓所にも彼の著作が見出されている。

CRの遍歴は、パラケルススの遍歴に重なる。パラケルススはイタリア、オーストリア、ボヘミア、アルザスの旅行記を残している以外に、スペイン、イングランド、スカンジナビア、ロシア、トルコおよび中東を旅したという伝承がある。また彼はイスラームの修行者からアルカヘスト（万能溶剤）の秘儀を習得したと主張した。

2. 2 トビアス・ヘス

もともとヘスは錬金術の実験を通じてアンドレーエの父と親しくしていたが、アンドレーエがテュービンゲン大学に入学後、アンドレーエ自身と親密になる。アンドレーエとともに「名声」「信条」を作成した友人グループに属しており、その中心的な人物と位置づけられる。

ヘスは法学、神学、医学を研究し、特定の学部には所属していなかった。パラケルススに心酔すると共に、ヨハネ黙示録に言われる千年王国が一六一三年に実現する

と主張、その预言活動により訴訟も起こるなど、大学当局からは要注意人物として扱われていた。アンドレーエはヘスの死後、彼の人となりと教養を称え、周囲の批判からヘスを擁護する弔辞を発表した。

2. 3 ドン・キホーテ

「錬金術的な騎士道物語」である『化学の結婚』とセルバンテスの小説『ドン・キホーテ』（一六〇五年）およびその主人公の類似性は、『化学の結婚』を薔薇十字運動の端緒としてだけでなく、文学作品として位置づけ、理解する上で重要である。近年、アンドレーエの蔵書の調査が進んだことにより、若きアンドレーエがセルバンテスをはじめとするイタリア、スペイン、フランスの大衆文学の熱心な読者であったことが確認されている。また、セルバンテスへのオマージュもアンドレーエの著作に散見される。ドン・キホーテはドイツでも人気があり、演劇として複数の都市で上演された。

3. まとめにかえて

CRは「名声」と『化学の結婚』で描かれるが、両者

は文体と形式のみならず、CRの人となりから得られる印象もまったく異なる。「名声」と『化学の結婚』によって明らかになるCRの人物像は、その曖昧さと矛盾ゆえに、読者にも空想と解釈の余地を大いに残していると言える。今後は、近代から現代にいたる薔薇十字運動の展開とともに、CRの人物像がどのように展開していくのかを追いたい。